

D. E. A. 論文(博士論文の準備論文)は留学終了翌年に日本から提出し、口頭試問は再度渡仏して受けた。このとき、外国語で学術論文を執筆すること、口頭試問によって論旨の正当性を認めてもらうことが日常会話とはまったく異次元であることを、留学中に以上に痛感した(しかも試問時に、手違いで指導教授が不在というハプニングもあった)。厳しい体験だっただけに、無事合格証書が送られてきたときは安堵と達成感でいっぱいだった。

厳しくも充実した大学の外では、現代音楽を中心に演奏会によく出かけた。シャトレ座やボンピドゥー・センターではシーズンを通して現代音楽のみのプログラムが組まれており、現代音楽の大家から新進の作曲家まで幅広く音楽を聴くことができた。それ以外のコンサートでもクラシックな作品と現代作品が並べられたプログラムも珍しくなく、ジャンルにとらわれず芸術が日常に自然に溶け込んでいることをしみじみと感じた。日本ではこのことがまだ十分に実現されていないことを考えると(先日もあるシンポジウムで、著名な作曲家がこのようなプログラム編成を自身の夢として語っておられた)、フランスが世界の芸術先進国の一つとしてゆるぎない位置を占めるのも当然のことと思われた。

今後の教育と研究

現在私は、教員志望の学生に音楽学を教えている。近年の教育は世界中のさまざまな音楽や伝統芸能に触れることを求めており、それに対応できる学生を育成することが私に課せられた仕事である。これは今日の音楽のあり方を反映した結果であり、学校の外も過去とは比較にならないほど多様な音や音楽に満ちている。こうしたグローバルな文化のあり方に否応なくかわるとき、それらを留学経験と照らし合わせることも多い。研究では、博士論文まではヨーロッパ現代音楽をテーマにしていたが、近年では日本の芸術音楽における洋楽受容について調べている。異文化としてのヨーロッパ音楽を二十世紀日本の音楽家たちがどのように受け止め、近代芸術音楽を創造しようとしたのかを考えると、やはりフランスで過ごした日々が文字通り血肉となつて、思考を支えている。

個人主義の本来本元とも言われるパリでは苦勞も多かったが、世界の芸術文化の中心で美しさや豊かさに囲まれ、自分の研究のためだけに過ごせたことは、本当に幸せなことだった。財団および日本万国博覧会記念機構のご支援に感謝しつつ、今後は、微力ながらその恩返しをしていきたい。

中央公論 11月号 発売中!

定価800円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社
TEL 03-3563-1431

特集 孤立する日本

日本は国際的な信用失墜の瀬戸際にある 田中均×田原総一郎
テロ特措法の挫折が日本にもたらすダメージ K・カルター
二大政党は党利党略を超えよ 井上寿一

米朝和平体制に日本は取り残される 伊豆見元
政治とカネのすべてを話します 鈴木宗男
自民漂流か、大連立の始まりか 岩見隆夫
小沢一郎の真贋はこれからの半年で見極める 中曾根康弘

<特集>おひとり様の正しい老後 吉田太一×香山リカ/上野千鶴子^{ほか}

膨張中国が抱えるジレンマ 松原隆一郎^{ほか} (読者参加特集) 私の人生を変えた『世界の名著』

異文化接触の原点

としてのフランス留学

国際文化教育交流財団一九九一年度奨学生。八九年東京藝術大学音楽学部楽理科卒業。九一―九三年パリ第八大学院博士課程留学。九三年東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程修了。二〇〇〇年同大学院博士課程満期退学。博士音楽学。日本学術振興会特別研究員等を経て二〇〇四年より現職。



埼玉大学教育学部准教授

神月朋子

こうつきともこ

留学までの経緯

「修士課程在学中に音楽学の分野でフランスに留学したい」という希望を持っていた私は、国際文化教育交流財団の奨学生試験を受け、何とか採用していただいた。決してメジャーとは言いがたい学問分野で、かつ修士課程でも受験可能な留学生試験は少なかったように思う(当時は在学中の大学の博士課程への進学は非常に厳しく、留学するのなら今のうちにといい気持ちがあった)。財団の柔軟な研究支援方針に改めてお礼申し上げたい。

カルチャーショック――短期滞在と長期滞在の違い

留学の前年に一カ月ほど私費でパリの語学学校に通ったが、そのようないわばお客

さんとしての短期滞在和、留学生として長く住むことはまったく違うことを、留学早々思い知らされた。フランス語で生きる

というものはラグビーのタックルを続けるようなものであり、相当に自己主張しないと文字通り生きていけない。人格を切り替えるという言葉がぴったりだろう。パリに着いて三日後に生まれて初めてスリに遭い、警察に駆け込んだこと、大小さまざまな差別を初体験したこと、寮や語学学校でフランス内外の外国人たちと語りあったこと、どのできごとともそれなりに苦労や悩みがあったが、逆にそれらをポジティブにとらえることが留学生活のコツではないかと思う。

大学の内外で学んだこと

パリ第八大学では、担当教授の指導の

●国際文化教育交流財団は、経団連第一代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三十一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

と自ら研究を進めて論文執筆を行うという、システム上は日本とあまり変わらない研究生生活を送った。しかし、その中身はさまざまな点で日本と異なっていた。異文化との接触という観点から以下で述べてみたい。

講義でもっとも印象に残っているのは、指導教授のS先生の講義である。ブルガリア訛りの早口のフランス語で話し続ける講義は、充分理解できないこともあったが、毎回多数の楽譜やレコード、CDをもとに二十世紀音楽について自在に語る姿に圧倒された。そこから伝わってきたのは、パリではいわゆる現代音楽が、楽譜であれ音であれ、当時の日本よりもdisponible(すぐ／自由に使えること)であることだった。同時に、音楽の原点は音の鳴り響きだということも再認識できた。今日の音楽学では、社会的・文化的脈絡から音楽を考察・分析するスタイルが中心を占めつつあるが、フランスで音そのものから思考するスタイルに接したことは、現在の研究を進める上で支えになっている。